

2030年までに
持続可能な社会を実現するために、
SDGsが示すさまざまな目標・行動指針。
その中で今、JAXAにできること、
すべきことは何か。
国連大学の沖大幹上級副学長に
伺いました。
文：井上 晋

おき たいかん
沖 大幹
国際連合大学 上級副学長
国際連合 事務次長補

聞き手
おの だ まさみ
小野田 勝美
調査国際部国際課 主任

SDGs達成に向けて JAXAが果たす役割とは

©JAXA

期待される JAXA全体での取り組み

小野田勝美(以下 小野田) 「SDGs(持続可能な開発目標)」について、日本でもメディアで取り上げられ、各企業の取り組みについても紹介されるようになってきました。今日は、SDGs達成に向け、JAXAによる貢献の可能性についてお話を伺いたいと思います。まず「SDGs」とは何かについて教えていただけますでしょうか。

沖 大幹(以下 沖) 2015年9月に開かれた国連総会の「持続可能な開発のためのサミット」で、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました。SDGsとは、その中で示された17の目標と169のターゲットから成る行動指針です。2030年に私たちはどのような社会に住みたいと思っているのか、その実現に向けて国際社会は何にに取り組むべきかについて包括的に話し合わせ、SDGsには、基本的にそのすべてが取り込まれています。すべての人にとって“wellbeing(よりよく生きること)”が増進するためには、貧困、食料供給、健康など、多くの解決すべき問題があります。そのため

を示して、それぞれの人が自分の得意分野から取り組めるようにしたものがSDGsだと思っただければよいと思います。

小野田 JAXAでは日本のSDGs実施方針に則り、3つのプロジェクトを登録しています。「だいち2号」(ALOS-2)などを用いた森林の把握、衛星全球降水マップ(GSMaP)を用いた洪水予測、そして「しきさい」(GCOM-C)などによる大気汚染の観測です。JAXAには宇宙ステーションや探査技術などがあります。宇宙教育活動も実施しており、たくさんの女性も働いています。そうした中で、宇宙活動によってSDGsに貢献できることがまだあるのではないかと感じています。

沖 私は、政府だけではなく企業にもSDGsに積極的に取り組んでほしいと思っています。国と民間の中間に位置するJAXAもそうです。利益の一部を社会に還元するものと捉えがちなCSR(Corporate Social Responsibility:企業の社会的責任)と異なり、SDGsは経営企画を担う部署が「企業の本流」として取り組むビジネスのヒントです。その意味で、JAXAでも、SDGsに組織全体の本来として取り組んでいただきたいのです。「20年後にはJAXAはこうい

う活動で社会を良くしています」という目標を設定し、そのためにSDGsを使うべきなのか、あるいは宇宙空間の有効利用、平和利用を一步推し進めて、それが人類社会の発展、幸福の追求にどのように貢献できるのかを考えていただくのがいいと思います。

小野田 確かに「JAXAの事業は、こういう部分(例えば森林保護や防災)で役立っています」と、個別の分野に収めてしまうと、世界の人が集まって決めたことの本質が見失われてしまうのではないかと感じられますね。

沖 その意味でJAXAは、ロケットのユーザーを増やすだけではなく、人間が宇宙に行くこと、宇宙探査が人類にとってどのような価値があるのかを、もっと深く追究してそのアイデアを広く共有していただければいいかもしれません。つまり、CSRを超えた、CSV(Value of V)ということです。ご飯を食べることも健康も大事だけれど、知的な満足感を得ることも人間には欠かせません。「人類が月に行くのはうれしいことだ」「火星を探索したい」「海王星の表面はどうなっているのだろうか」。そういう、新しい価値を創造するための基礎科学の役割

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 世界を変えるための17の目標



をもっと押し出し、これこそ追究する価値があると提案するくらいの迫力があっていいのではないのでしょうか。

SDGs達成に生かすべき JAXAの強みとは

小野田 国連のお立場から、JAXAにはどのようなことを期待されますか？

沖 公的な立場にあるJAXAが、地球全体を見守ることができるのは大きなアドバンテージです。森林や大気汚染監視にとどまらず、人口の拡大スピードより都市の拡大スピードが大きいことが的確に判断できるのは、人工衛星のおかげです。通信機能もそうです。今や世界で50億から60億の人が何らかの携帯電話を使えるようになっていそうです。こうした情報基盤にどういった情報や知識を流して使ってもらおうのかも、SDGsにとって大きな鍵となります。そうした場面にもJAXAの技術やミッションを役立てられないかを、ぜひ考えていただきたいですね。

小野田 JAXAがいろいろな分野でSDGsに取り組んでいるということを中心に説明すると、どの国の人もすぐに分かってくれるということは、すでに私たちも気づいています。

沖 JAXAがSDGsの技術指標の進捗状況を、責任を持ってモニタリングしますという約束が一つでも二つでもできるとかなり大きな強みになると思います。技術指標に含まれていなくても、衛星を活用してできることを提言するくらいの勢いが欲しいですね。時間がかかるかもしれませんが、続けることによって貢献しているというア

ピールにはなる。国際的な評価を得ていくことが大事です。

小野田 その点ではJAXAはCOPUOS(国連宇宙空間平和利用委員会)や、GEO(地球観測に関する政府間会合)などの結びつきがあります。GEOでは、SDGsのどのインディケーター(指標)に地球観測データを用いることができるのか、さらに地球観測データを用いた課題解決の事例をまとめたレポートも出ています。

沖 リソースは限られていますので、戦略も大切です。経営企画的にJAXAとしてこのセンサーによるモニタリングは継続したい。この衛星のミッション継続のためには、この指標のモニタリングをし続けなければならないというのはいくら理由づけになります。そしてモニタリングの結果を世界中でどんどん使ってもらおうのです。

小野田 この11月にインドで開催された、APRSAF(アジア・太平洋地域宇宙機関会議)でもSDGsについて宇宙機関長が議論しました。また、IAC(国際宇宙会議)で、JAXAがオーガナイズしてSDGsのパネルディスカッションを行ったところ、多くの聴衆も集まり、非常に議論も盛り上がり、JAXAがリードしていると認識してもらえました。

沖 そのモメンタムを失わないように、SDGsのミッションに常に取り組む姿勢を見せ続けることが大事です。

提携しリードし 貢献する

小野田 人工衛星で衛星全球降水マップ

(GSMaP)を作成して災害対策に取り組んでいることなど、日本の科学技術によるSDGsへの貢献を、国連のSTI(科学技術イノベーション)フォーラムの議長も認めていたという話も伺いました。

沖 途上国は先進国からの投資が欲しい。ただ、資金は限られているので、イノベーションが必要です。例えばJAXAのGSMaPは一つのイノベーションだったと思います。現在、どこでどのくらい雨が降っているかがいつでもどこでも手元のスマホで見ることができる。すごいことだと思いませんか。果敢に挑戦して天下を取りにいこうとすることが大事だと思います。

小野田 それでは具体的な話をすると、SDGsの目標6である、水の分野についてはどのように進めたら良いのでしょうか。

沖 そうですね。洪水の情報を提供するだけでなく、ほぼ実時間で得られる水循環情報を農業分野/食料生産と結びつけたり、ダムや堤防の操作や堤防作りに活かしたり、氾濫のシミュレーションをするなど、この分野ではまだ世界と勝負できる可能性が高いと思います。

小野田 企業と提携して何か動きを起こしていけるといいですね。最近は宇宙産業への関心が高まっています。

沖 SDGsは、民間企業がビジネスとして世界的な課題解決に取り組むことを歓迎しています。宇宙の民間利用によって収益を上げることも、持続可能な宇宙の平和利用に繋がるという発想です。森林伐採についてもそうです。10、20年後に森林減少は止まる可能性があるとは思っています。それをいかにモニタリングして情報を世界中に発信していくか。そのためには自分たちがアクティブなプレーヤーになることです。JAXAにはぜひSDGsをリードしていく存在になってほしいと思います。そして、もちろんSDGsの16番目にpeaceが、17番目にglobal partnershipとあるように、世界中の人間・社会と地球環境全体を考えていくことが大切です。

小野田 これから将来のJAXAの活動目標や計画を定めていこうとする中で、SDGsに取り組んでいく必要性がよくわかりました。国連とも協力して、ぜひそうした方向性を打ち出していきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。